



流月を

月を流さず

和歌の伝
早坂文明

栗山房

流月を

月を流さず



月を 流さず



和尚の 語り草

早坂文明

蕃山房

第一回テレホン法話ライブ 徳本寺テレホン法話七〇〇話記念	
『クメールの宝物』カンボジアに絵本を贈る	14
金が信念／托卵／いたましい思い／マッサージ・ロードを行く／ゲーム・セット／ニュースな寺／御目の滴／＼ひ＼の相続	

第二回テレホン法話ライブ テレホン法話第二集『僧が語る印笑的な話』出版記念	
忘れない	26
坂／宅配便／七・九キログラムの募金／もう一つの『クメールの宝物』／一緒に懸命／忘れない／千の風のゆくえ／イエスタデイ	

第三回テレホン法話ライブ	
痛切に生きる	38
合掌・決勝・吉祥／見えない努力／ダメ出し／バイオリン貴公子／玄関の言葉／おぼんです／線香と桜の花／痛切に生きたい	

第四回テレホン法話ライブ 徳本寺テレホン法話八〇〇話記念	
悔いなし	48
けいこは嘘をつかない／千年仏／名前のある鯉／蓮と太陽／猫は悩まない／完璧な試練／みちしるべ／日本一短い最期の手紙	

第五回テレホン法話ライブ	
東日本大震災Ⅰ 涙を超えた想いを語る	58
ツナミちゃん／涅槃に流れて／天明から平成を観る／大和撫子／不動心／心の大黒柱／生きて花なれ／復興への合唱	

第六回テレホン法話ライブ	
東日本大震災Ⅱ 涙と笑顔のおもかげ抱いて	74
モツタイナイ／風化／ほんとうの空の下で／おもかげ時間／夏草や／はがき一文字写経／供養の石／消えたニュース	

第七回テレホン法話ライブ	
東日本大震災Ⅲ 三・一一 その先へ	86
予言／功の多少 彼の来処／春告げ鳥／鍬を挿む人／慈悲というランドセル／ご縁の連鎖／津波に耐えた大樹／三・一一その先へ	

第八回テレホン法話ライブ	
東日本大震災Ⅳ 転んで転じる	98
五輪／黄色いハンカチ／土を動かす／復興交響曲／二分二〇秒／命日／「金目」では見えない／転んで転じる	

第九回テレホン法話ライブ 徳本寺テレホン法話千話記念	
東日本大震災Ⅴ 千話一話	108
モーニング・コール／たんじょうび／ある弔辞／人みな幸を／太陽のような情け／レジェンド／選びつつける／千話一話	

第一〇回テレホン法話ライブ	
東日本大震災Ⅵ 拍手が響く新しい舞台に	120
恨まない 羨まない／願生／衣鉢を継ぐ／偉心電信／語り草／心の非常食／人を憂う／大樹からの拍手	

♪演奏曲リスト 136	スタッフ紹介 138
「テレホン法話」をお聴きいただく方法 140	「はがき一文字写経」のお申し込み方法 140

前口上

——テレホン法話ライブへの誘い——

一 「テレホン法話」って何？

本書を手にとってくださったほとんどのみなさまにとっては、「テレホン法話」って何？ 更に「テレホン法話ライブ」？？？でしょう。

テレホンサービスという言葉聞いた方、利用された方はいらっしゃるのではないのでしょうか。テレホンサービスの第一号は「天気予報サービス 177」で、昭和三十年（一九五五）に始まったそうです。然るべきところに電話をすると、天気予報や各種の情報などを聴くことができるサービスです。エンドレステープに吹き込まれた情報を、二四時間いつでもどこからでも電話で入手できるというものです。昭和五十年代に、このシステムを法話サービスに応用したのが「テレホン法話」です。電話でお釈迦さまの教えを布教する手段として始まりました。但し電話の基本料金が三分間一〇円という時代でしたので、その時間内で伝えられるほどの内容でした。

徳本寺では、前住職ぶんえいだいおしょう文英大和尚が昭和五十九年（一九八四）二月に始めて、約三年継続しました。そして昭和六十二年（一九八七）十二月から、私が引き継ぎ今年で三〇年になります。当初から、一日・十一日・二十一日と月三回法話を更新してきました。一年間に三六話です。で優に千話を超えています。「テレホン法話」が始まったところは、電話で法話が聴けるということで、宗派を問わず、全国の寺院で結構開設されていたと思われます。当時としては画期的だったでしょう。しかし、時の流れでしょうか、テレホン法話の効能が薄れてきたのか、開設寺院が少なくなってきました。インターネット等による情報発信から比べれば、いかにも前時代的な布教手段かもしれません。それでも続けていれば、毎回必ず電話が鳴ります。聴取回数は表示されますが、どこのどなたかというのは分かりません。その数はこれまで延べ五三、〇〇〇回を超えています。（「テレホン法話」をお聴きいただく方法 一四〇頁参照）

二 テレホン法話ライブって何？

月日を重ねて、「テレホン法話」を始めて二〇年が経ち七〇〇話を超えたころ、「テレホン法話」を目に見えるものとして表現できないか、と考えました。電話でただ話を聴くというのは、

結構忍耐がいるものです。ましてや、私の声と話し方では説得力に欠けるという自覚がありました。それを補うために音楽と映像の力を借りつつ、本堂で私が直接語りかける生のテレホン法話を聴いてもらおう、見てもらおうと思いつたのです。寺や法話に対する、堅苦しさを払拭したいという思いもありました。徳本寺「テレホン法話」は「三分間心のティータイム」と謳っていましたので、実際にお茶を飲みながら、平成十九年（二〇〇七）六月に年一回の「テレホン法話ライブ」が始まりました。そして、平成二十八年（二〇一六）に第一〇回目を迎えました。「テレホン法話」は現在もちろん続いていますし、これまでの法話を徳本寺のホームページで読むことができます。さらに「テレホン法話」の選集として六冊の書物を刊行してありますので、そちらでも読むことができます。ただ、これまでの「テレホン法話ライブ」の記録を見直してみると、「テレホン法話」で伝えなかったことと同じくらい大切なメッセージや背景が、法話と法話の間におしゃべりしたことの中にあることに気が付きました。そのこともお伝えしたいという思いから、一〇年分の「テレホン法話ライブ」をまとめたのが本書です。

三 テレホン法話ライブの構成

テレホン法話ライブは三部構成です。毎回、すでに発表したテレホン法話の中から八話を選んで紹介しています。前半に四話、後半に四話を朗読します。そして、その中間に三〇分ほどの時間をもうけて、当日お招きしたゲストの方にご登場いただいています。ゲストは毎回お一人または一組で、話芸や曲芸や手品などの演芸、バイオリンや三味線などの器楽演奏、そして歌唱などをお届けしています。また、八話の法話の全てには、ピアノ演奏によるBGMが流れます。話の内容に相応しくなおかつ臨場感あふれるような、歌謡曲・ポピュラー音楽・クラシック音楽などから選曲しています。さらに、つたない法話を理解する一助に、法話にちなんだ写真や仏教語の解説文字を会場のモニターに映し出してご覧いただいています。

当日紹介する八話の法話は、もちろん一話ごとに完結しているのですが、ライブ全体のテーマが浮かび上がるようにと選び、朗読の順番を決めています。だから当初発表した年月日順ではありません。各法話は要旨のみにして、「法話」と「法話」の間の「おしゃべり」を読んでいただく趣向となっています。ただ、「テレホン法話」自体をまったく紹介しないわけにはいきませんので、その回のテーマにふさわしい法話を、「この一話」として、各回の最後のところに紹介しました。

電話による「テレホン法話」の三分間では伝えきれなかった背景となるところを、「テレホン法話ライブ」ではきちんと伝えたいという思いがあります。ではみなさん、紙上ライブにおつきあいください。

徳本寺テレホン法話七〇〇話記念

『クメールの宝物』カンボジアに絵本を贈る

平成十九年（二〇〇七）二月、私がボランティア活動の縁でカンボジアを訪れている時、日本では母が危篤状態になりました。そして三月に亡くなりました。その八年前には父を亡くしています。糸の切れた風船のような虚しさを覚えました。しかし、父から受け継いだもの、母の恩に報いるもの、それやこれやの想いが、カンボジアとのつながりを深くしてくれました。父から受け継いだ三分間というささやかなテレホン法話ではありますが、継続が何がしかの力になったような気がします。



『クメールの宝物』

「ゲスト」 鎌倉幸子

「スタッフ」 ピアノ…加藤千鶴子

制作／映像…鈴木佳寿

写真…齋藤貢一

協力…ライフサポートわたり

* * *

【第一部】

♪オープニング曲〈エイパネマの娘〉

第一話 金が信念 平成十九年（二〇〇七）一月十一日発表

♪BGM〈エイパネマの娘〉

——正月に会った庭で元気に遊んでいる少年たちに声をかけると、「金の玉を持っている」と、大らかにいう。「金の玉」は「生の玉」で命の源。今年も金のように輝き、元氣な生き方を信念としましょうというお話。

一話三分間のテレホン法話が二〇年間で七〇〇話となりました。二、一〇〇分、時間に直すと三五時間、たった一日半で喋りきっちゃう。内容も軽いでしょ。のっけから寧丸の話ですかね。なんと恥知らずな和尚さんとお思いでしょ。これがホントの厚顔無恥（笑）。お茶を飲みながらゆっくりとお過ごしください。ピアノはかなり茶話やかです。私の話はお茶を濁すようなものですが……。

今の話にありましたように、少子化とはいえ、元氣な子どもの姿を見るといいのはうれしいものです。なかには悲惨な運命の下に生まれた子どももいます。それに因んで次は「托卵」という話です。

第二話 托卵 平成十八年（二〇〇六）五月十一日発表

♪BGM〈七つの子〉

——鳥の「托卵」とドイツの「捨て子ポスト」を例話に、『仏説 父母恩重経』より母親の心を説くお話。

この話は昨年の母の日に発表した話です。今年こうなることを予言した話ではないんですが、今年の五月十日に熊本の慈恵病院で、赤ちゃんポストの運用を開始しました。

「母にあらざれば養われず、母にあらざれば育てられず」。

テレホン法話を二〇年七〇〇話休みなく続けてこられました。これはひとえに聴いてくださるみなさまのおかげです。と同時にこの間、幸いにして病気をしませんでしたので、何とか続けることができました。こんな丈夫な体に産んで、育てくれた私の母にいつも感謝しております。が、今年の三月六日に突然母が亡くなりました。先日六月十三日に百カ日を終えたばかりです。本当は母にもこの場にて欲しかったのですが、叶いませんでした。そんな母に対する供養の意味も込めて「いたましい思い」という話を聴いてください。

いはがきと交換し、それを購入していただき資金にするというものです。平成四年（一九九二）ごろの話です。そこから毎年のように学校を贈り、今も続いています。

また個人的にはカンボジアの子どもたちに絵本を贈るという運動も行っています。これはみなさまから寄せられた募金もありますし、私のテレホン法話集という本の売上げ等々でカンボジアに今まで四タイトル二、〇〇〇冊ほどの絵本を贈ってきました。

昨年『クメールの宝物』という絵本を寄贈したんですけれども、その本の内容が、日本人にとっても、私たち坊さんにとっても、大切なことが書いてあるので、日本のみなさまに伝えたいと思いました。クメール語を日本語に訳した『クメールの宝物』を今日、出版発売できる運びとなりました。カンボジアに関わる活動をコーディネートしてくださっているのはシャンティ国際ボランティア会（以下SVA）（P.2）です。今回の出版にあたって翻訳等の労をとっていただきました、SVAのカンボジア担当のスタッフ鎌倉幸子さんに、今日はお出でいただきました。

【第二部】

（鎌倉さん登場 『クメールの宝物』が誕生した背景のお話（P.3）
（早坂住職再登場）

先ほどカンボジアで行われた移動図書館車の贈呈式の映像をご覧いただきました。今年の二月二十三日のことです。これは曹洞宗東北管区教化センター三〇周年記念事業として行われ、私も教化センターの責任者として贈呈式に参列しました。その時日本では私の母が危篤状態になっておりました。カンボジアに着いたその日だったんですね。私も戻る戻らない色々悩みました。結果としてこのような盛大な贈呈式に参列し、みなさまにご披露を申し上げることができて、それはそれで良かったと思います。

現地の方々の前で挨拶などを務めさせていただきましたけれども、心の中では、

「このカンボジアの青い空が日本にも続いている。
その空の下では母が危篤状態になっているんだな」

ということを思っていました。本当に複雑な思いで母に対し手を合わせ続けながら贈呈式を行いました。私が戻るまで何とか息はしていたのですが、なんら言葉を交わすこともできず、三月六日に七九歳で亡くなりました。



クメール語で『大きなカブ』の読み聞かせをする鎌倉さんと会場のみなさん

カンボジアにて



絵本『大きなカブ』の読み聞かせ



絵本を読む子どもたち



小学校の教室

山門の脇の掲示板にいい言葉が書いてあったのご覧になりました？

「鳥は飛ばねばならぬ 人は生きねばならぬ」

さて、これから四択のクイズ。どなたの言葉でしょうか。

- ①番 坂上田村麻呂 ②番 坂上二郎 ③番 坂村真民 ④番 早坂文明
みんな、「坂」がつかますが、何番でしょう。

（はい、③番の坂村真民」と会場から答えの声があがる）

大正解です。やなせさんの色紙を贈呈いたします。

（正解者は横浜からの参加者で、今日が誕生日ということで、喜ばれた）

早坂文明はさらにもう一句加えるんです。

「鳥は飛ばねばならぬ 人は生きねばならぬ 仏は死んではならぬ」

えーっ！ 仏は死んだ人じゃないの？ って思うかもしれませんが、それも間違いではないでしょうけれども、こういう言葉がありますよね。

「人は二度死にます 一度目は死んだ時 二度目は忘れられた時」

一度目の死はどなたも等しく迎えなければなりません。しかし、二度目の死は迎えてはならない。それが「忘れない」ということであり、「仏は死んではならぬ」ということであります。

今回の大震災という本場に未曾有の難に遭いながらも、今なんとか無事にいる私たちです。有ることが難しい。もしかしたら命を失っていたかもしれないのに、今ここに有る。まさに「有り難い」存在をいただいている。そのことをまずは忘れない。震災を忘れない。

そして亡くなった方は
計り知れない無念の想いを抱いて逝ったことでしょう。

その無念さを決して忘れることなく、それをこれからの復興のエネルギーに変えていくことです。

冒頭のお話にありました「ツナミちゃん」という名前。私たちはあそこまでの発想はなかなか



会場のみなさん



全国から寄せられた一文字写経

永六輔さんの一文字写経

「はがき一文字写経」は、所定のはがきにお経もしくは復興を願う一文字を一心に写経して送っていただくものです。徳泉寺が復興した折には、みなさんの写経を本堂に納めて永代に供養いたします。一口五千円の納経料は同封の振替用紙でお納め願います。納経者には難を逃れたありがたい一心本尊を刻印した金属製のお守りカードを授与します。これは無難無災をご祈禱したものです。その一心本尊がこの奥に祀られてございます。お帰りの際に手を合わせてください。（はがき一文字写経」のお申し込み方法 一四〇頁参照）

これが全国から寄せられている一文字写経です。納経の第一号はあの永六輔さんです。

（はがきのファイルを見せる）

今年の三月から始まって、北海道から九州まで全国の方が、願いをこめて写経してくださっております。

写経は一、二〇〇年前の聖武天皇の時代に始まっています。国分寺あるいは国分尼寺というお寺に、お経を写したものを納めたというのが始まりです。その後、個人的に供養のためや何かの願いをこめて写経をして、その功德にあずかるようになってきました。その写経をお堂に納めていただき、毎日和尚さんが拝んで、みなさんの功德を仏さまに届けていくわけです。そこで、お堂が必要になります。写経も功德がありますが、お堂や供養塔つまり墓石も建てる功德があるとお経に示されています。どのくらい功德があるかといえば、あまり詳しくいうとくどくなる（笑）。ということで次のお話に移りましょう。

第七話 供養の石 平成二十四年（二〇一二）三月十一日発表

♪BGM〈映画『短くも美しく燃え』の挿入曲〉

—— 高校卒業後すぐ、夢に向かう一步として、自動車教習所に通っていた少女は、その帰宅途中、津波の犠牲になった。一周忌に合わせて両親は少女のために、墓石を建てた。石には「歩」と大きく刻まれ、その下に「ただ信じた道を真つすぐ進むだけ」と書いてある。それは書道部だった少女が書き残していた直筆の文字だった。そんな供養の石のお話。

♪途中〈千年眠れ〉の歌（p.3）が流れる



「歩」の墓石

今聴いていただいた「千年眠れ」の歌詞の一番に、「黒い絵の具の大地」とあります。坂元中学校という避難所が、高台にあります。そこから私が震災の次の日に見た景色が、まさに黒い絵の具をぶちまけたような、ヘドロだらけの大地で、「千年眠れ」という詞を書くきっかけになりました。

二番は「緑に変われ大地」と表現しました。あの黒い大地に、もはや草は生えないだろうと思いました。ちゃんと生きてきましたね。ただ、草が生えているだけでは、人が生きているということにはならない。

相田みつをさんの言葉に、「歩くから道になる。歩かなければ草が生える」

そのイメージソングの動画が完成いたしましたので、ご覧ください。

（「ひとつの心」の映像流れる）

書くということは、本当に力のあることです。

この写経も勿論そうですし、手紙の力・新聞投書の力というのもありますね。ペンは細いですが、樹齢四〇〇年で幹まわりが三メートル以上の太い大木をも守る力があるということを実証した例が次の話です。

第七話 津波に耐えた大樹

平成二十五年（二〇一三）四月十一日発表

♪BGM〈空〉

——「まけないタオル」の歌詞のモデルになった津波に耐えた大樹。檀家さんの屋敷にあったものだが、災害危険区域のため、伐採の危機が迫った。檀家さんがそのことを新聞投書で訴えたと、反響があった。後日談については以下に述べる。大樹の傍には震災鎮魂塔である千年塔（3）が建っているというお話。

（大樹の写真と、「まけないタオル」の実物を見せて説明）

「まけないタオル」という歌に「大樹に負けない根っこの心 揺るぎはしないから」とありますが、その一節が大好きで、毎朝通勤中に聞いているという滋賀県の男性がおります。今年になってその方がわざわざお出でになったんです、モデルの大樹も見たいということで。実はこの大樹は、伐採の危機にあるんですといったら、滋賀県から河北新報に投書をしてくださいました。いろんなつながりがありまして、なんとか大樹が残るようです。是非復興のシンボルになって欲しいですね。

テレホン法話も九〇〇話続けてきましたが、一番の中断の危機は震災の時です。これでテレホン法話も終わりと覚悟しました。でも何とか継続できました。あの震災の時にもちゃんと聞いてくださる方がいたというおかげです。そういった方々に、感謝の思いを込めて最後の話をお届けいたします。



津波に耐えた大樹

